

いつでも「おかえりなさい」

医療機関に通院していた患者さんが、いつの間にか（こちらが気づくのが遅いのですが）来院されなくなることを通院中断と言います。どれくらい来院されないと通院中断というかについてはいろいろ意見がありますが、当院では来院予定日を3ヶ月以上過ぎても受診されない場合を通院中断と決めています。1年間のうちで通院中断の方は約17%に上ります。一般的には通院中断は約30%（3割）ですから、当院は少ない方になります。中断理由は転居が一番多いのですが、その他では一定の傾向はなく、様々な理由で来院できなくなっています。転居の場合は、転居先の近くの医療機関に紹介状を書きますので問題ありませんが、それ以外の理由の場合は何らかの対策が必要となります。

大元さんは40歳の女性ですが、去年の7月依頼プツンと来院が途絶えてしまいました。両方の目に糖尿病による合併症もあり、尿にタンパクも出ているので薬を服用しながらの定期的な通院が必要な方です。ある日、5ヶ月ぶりにひょっこり再来院されました。「仕事と義父の介護、子供の幼稚園のことなどで忙しく来れなかったの」「大変だね。これから大丈夫？」「月1回くらいなら来れます」「じゃあ、そうしよう」ということになりました。この日のHbA1cは13.0%と、今月当院に来られた方のなかで最もコントロール不良の数字でした。「でも先生、入

院はできないよ」と。

平さんは58歳になる2型糖尿病でインスリン注射をしている女性です。姉妹のため皆さん嫁いでおり、年老いた両親を介護する人がいません。嫁ぎ先から姉妹が交代で福島に住んでいる両親のもとに介護に行きます。両親とも施設への入所は希望しないとのこと。1週間交代で仙台から福島へ、そのため定期的な通院がままならず、通院中断にはなりません。月に一度の外来通院も不定期で手持ちのインスリンも切れがちです。患者さんも58歳と決して若くはないので、体にこたえることも多くあり「もうへとへと。私のほうが先に参っちゃいそうだわ」と弱音をはかれることもあります。幸いHbA1cが6%台のため糖尿病とその合併症は今のところ心配ありません。

このように最近よく患者さんから耳にする言葉は、「親の介護のため、なかなか来院できない」ということです。要介護という現状が、既に決して若くはない糖尿病をもった患者さんの生活に多大な影響を及ぼしています。どんな理由があっても、一度通院を止めると来にくくなるものです。このような現状をふまえて、医療従事者は不定期通院の患者さんが久しぶりに来院されたとき、いつでも「おかえりなさい」という気持ちで迎えるようにしたいものです。